

心の色

梶中学校 三年 橋本 詩音

私は何色だろう。昔の私と今の私の心の色は、同じだろうか。「変わりたい。」と思ったあの時から、変わることが出来ているのだろうか。

「スクラッチ」は、コロナ禍を生きる中学生の物語。バレー部部长で大雑把な性格の鈴音、冷静沈着な美術部部长の千暁。正反対な二人が、周囲との関わりを経て、迷いながらも未来へ進んで行く物語だ。

私は鈴音とその親友の文菜の関わりに私と私の親友の関わりを重ねた。鈴音の気持ちが悪くなったり、悩んだりしている時に、文菜は必ず鈴音に寄り添っていた。文菜は鈴音を独りにしない。私の親友も、そうだ。私はよく悩む。悩む度に心に不安が募り、心細くなる。そんな時親友は、いつも私の隣にいてくれる。私は、親友の優しさに、どれ程支えて貰っているだろう。私が私を支えてくれる親友を大切に思う様に鈴音も文菜のことをきつと大切に思っている。だからこそ、高校では一緒にいられないと知った時の鈴音の気持ちを考えると、胸を締め付けられる様な気持ちになった。自分の心に優しい色をくれ、ずつと自分を支えてくれた人との別れ。私だ

ったら、寂しさに心を埋め尽くされて、何も出来ないと思う。しかし鈴音は涙を堪え、文菜の背中を押し、文菜に貰った優しい色を返すことが出来ていた。私は鈴音の強さと優しさに憧れると同時に、私自身も鈴音の様にありたいと思った。

次に私は、千暁に心を動かされた。千暁は市郡展の審査で二年連続特選をとっていた。そして今年の審査でも特選をとろうという気持ちで絵を描いていた。受賞するために、「正解」から外れない絵を。しかし、鈴音が誤ってその絵を汚してしまった。その汚れをきつかけに、千暁は絵を描き直した。今度は、自分の気持ちのままに。「正解」から外れたかもしれないが、千暁にとっては、最高の作品になったと思う。そして私は、千暁にとつての絵は、私にとつての作文と同じだと思つた。私は、作文を書くことが好きだ。昔は自分の気持ちのままに書いていたのに、いつからか千暁の様に受賞するために「正解」から外れない文章ばかり書く様になっていた。そしてこの文章も、最初は「正解」を目指して書くつもりだった。しかし、やめた。自分の気持ちのままに絵を描く千暁の、いきいきとして鮮やかな心の色を感じて、私も千暁の様に偽らない気持ちを書きたいと思つたからだ。

「正解」からは外れているかもしれないが、これが今の私だ。私は、心の呪縛から解放され、晴れやかな気持ちになった。

私は、千暁と千暁の母の関わりにも心を動かされた。千暁の母は台風に対するトラウマを持つている。千暁は母を励ますために明るい色彩で、「正解」から外れない絵を描いていた。しかし、今回千暁が描いたのは、黒い画面に鈴音の泣き顔。私はこの絵が千暁の心を、千暁自身も知らなかった傷も含めて写し出しているのではないかと思つた。暗い色の心は傷だらけで泣いている。でも虹色の光が差している。きつと千暁は、この絵を描くことで傷も含めた自分自身の心と向き合うことが出来たのだと思う。そしてその絵は、母の心も動かし、母をトラウマと向き合わせた。トラウマに向き合うためには勇気が必要だ。私もトラウマを持つていた。向き合う勇気が出ず、長い間トラウマに囚われていた。しかし昨年、担任の先生がそのトラウマを受け入れてくれたことで、私はトラウマと向き合うことが出来た。先生が私にトラウマと向き合う勇気をくれたからだ。同じ様に、千暁の絵も母の心にトラウマと向き合う勇気を与えた。トラウマの克服は難しいことであるが、トラウマと向き合うことで、母の心の傷も少しず

つ癒えて行くに違いない。千暁の絵は母の心に「正解」よりも強く、そして優しく響いたのだろう。私も「正解」よりも大切な物が、その優しさがわかった気がする。

私は人に頼ってばかりで、一人では何も出来ない。だから心の色も真っ白だ。そう気付いた時からずっと、変わりたいと思っていた。自分一人の力だけで、自分の心の色を見つけ、変わらなくてはならないと思っていた。それは違った。鈴音も、千暁も、千暁の母も、人と関わり合って変わった。人と人の心の色が混ざり合って、自分の色になって行く。私ももう、真っ白ではなかった。親友から貰った優しい色、千暁に教えて貰った鮮やかな色、先生に貰った勇気の暖かい色、そして後悔やトラウマの暗い色。それらが混ざり合って、私の色になる。きっと誰も、一人では変わらない。人と関わって、心の色が混ざり合って、変わって行く。これからは、私がそうして貰った様に、私も誰かの心に色を与え、変わるきっかけを作れる人になって行きたい。

きみの友だち

第一中学校 二年

グエン フアン トウエ アン

NGUYEN PHAN TUE ANH

(友だちって、なんだろう)

こんなことを考えながら私はとぼとぼ歩いていて。別に決まった目的地があるわけでもないのに、私の足は、勝手に動いていた。歩いて歩いて、ふと気が付くと、いつの間にか行きつけの本屋の前まで来てしまっていた。特に買いたい本があったわけでもなかった。それなのに、私の体はまるで何かにすい寄せられたように店へと入っていった。私はボーとしながら棚に置かれている本をながめていた。そのときだった。不意に、一冊の本が目にとまった。タイトルは、「きみの友だち」。運命なのか偶然なのかわからなくなるくらい。絶妙なタイミングだった。これが、「きみの友だち」と私との出会いだった。

舞台は少女少女たちの学生時代。ある事件がきっかけでクラスのだれとも付き合わなくなった、足の不自由な恵美ちゃんと病気がちな由香ちゃん。二人を中心に、複雑で理不尽な人間関係が十話で描かれた短編小説、「きみの友だち」。

今日、学校で友だちとケンカをした。きつ

かけは、ほんのささいなことだった。が、それがいつの間にかエスカレートし、口論まで発展してしまった。しまいには、「あんたなんか友だちじゃない。絶交だよっ。」とまで言われてしまった。「絶交」のキーワードが針のように心につき刺さった。今まで全ての友人とは上手くやってきたつもりだった。全て、ゼロから努力して築き上げたものだった。慎重に、少しずつ、時間をかけて、やっとの思いで築き上げてきた。だから、絶対に壊れないと、勝手に思い込んでいた。それなのに、今日という日に、全てが壊れてしまった。

小学校三年生、二学期終盤に差し掛かる中途半端な時期に、私はベトナムから日本のある小学校へ転校した。言葉を全く理解できないまま学校に通い続ける日々は、退屈で仕方がない。そして、友だちが一人もできないまま、一カ月がすぎた。転校してきたはじめの頃はみな、興味津々な様子でたくさん話しかけてきてくれたが、私が日本語を理解できないということがわかったのか、周りから人がどんどん離れていってしまった。そのとき、「たくさん勉強して、友だちをたくさんつくりたい。」と思った。

この決意通り、それからの私は、毎日鏡にむかってあいさつの練習をしたり、日本語の

勉強をしたり、自分自身でできることを全て、毎日諦めずに続けた。そして、日本語を少し使えるようになった頃、私は思いきってクラスメイトたちに話しかけた。正直、こわかった。バカにされて、仲間に入れてもらえなかったら、どうしようと、ずっと思っていた。だが、みんなは快く私を受け入れてくれたのだ。一人の「仲間」として。「友だち」として。単純にうれしかった。みんなといるだけで、幸せでいっぱいだった。全てが順調だった。それなのに、私はどこでなにを間違えてしまったのだろうか。どうすればよかったのだろうか。「友だち」って、なんて脆いものなんだろう。さっきまでみんなが群がってわいわいしていたのに、夕方にはもう一人ぼっちになっていた。そんな私は、「きみの友だち」の堀田ちゃんにそっくりだ。いつも笑顔をふりまいて、みんなに面白がられて、常に輪のなかにいる堀田ちゃん。でも、本当は一人。「ぼっち」だった。友だちなんて、最初から一人もいなかった。私も、堀田ちゃんも。「みんな」といっていると、疲れるのだ。なぜなら、私たち二人は場の盛り上げ役だから。常に面白くないといけない。だから、恵美ちゃんの言葉が余計に刺さって、苦しい。「自分がつまらないんだったら、やめちゃえばいいのに」

そう、疲れるなら、やめてしまえばいいのだ。でもそれは、シンプルなのに、とつても難しい。だって、「一人」が、「ぼっち」がこわいのだから、「みんなと」をやめることなんて、できやしない。けれど、恵美ちゃんを見てみると、不思議と勇気がわいてくる。「みんなと」を捨てて、一時期は「ぼっち」だった恵美ちゃん。だが、それがきっかけで由香ちゃんとの絆が生まれたのだと思うと、私も一度は「みんな」を捨てて、新しい関係をつくってみてもいいんじゃないか、と思えた。

恵美ちゃん。あなたは誰よりも強く、優しい人だ。そのそっけないところこそ、あなたの強さや優しさに満ち溢れていると、私は思う。そんなあなたを見て、私は一つだけ、わかったことがある。何かを失わなければ、人は成長しない。「みんな」から離れることで新しい一步を踏み出せる。その先にはなにがあるのかはわからないけれど、立ち止まったまま変化しないよりはずっといい。勝手な解釈だけけれど、私にはあなたの言葉が、そんな風に伝わった。本当に、ありがとう。

堀田ちゃん。私はあなたの将来の姿を知らないけれど、どうか幸せに生きていて欲しい。嫌かもしれないけれど、同志として、君の幸せを祈るよ。これからも、一緒に頑張ろう。